

オリンピックは道徳実験室でありうるか? : 「生き方の哲学」としてのオリンピズムの可能性

稲岡大志 (大阪経済大学)

オリンピックの開催をめぐるのは、開催国決定をめぐるさまざまなゴシップ、開催国の経済的・環境的負担、過度の国家主義や商業主義の蔓延、絶えることのない薬物使用など、多くの批判が提起されている。これらの批判に加えて、大規模な競技大会を定期的に行うことの意義もまた問われている。なぜなら、ほとんどのスポーツ競技には、世界大会に類するものがあり、「世界で一番強い選手ないしチーム」を決める場が用意されているからである。にもかかわらず、上記のような批判を受けてもおオリンピックを開く意義はどこにあるのか。「近代オリンピックの父」であるピエール・ド・クーベルタンは、「世界平和に貢献するスポーツ」としてオリンピズムを唱えた。すなわち、オリンピックとは、単なる世界一決定戦ではなく、世界平和の促進に貢献する役割も担うのである。したがって、クーベルタンは、オリンピックにおける競技は単なる競技スポーツとは異なる何かを持つ、と考える。しかし、クーベルタン自身は、この「異なる何か」をより具体的に特徴づけることはなかった。

クーベルタンのオリンピズムを継承するかたちで国際オリンピック委員会が定める「オリンピック憲章(Olympic Charter)」は、「オリンピズムの根本原則」として、「オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である」とし、そのうえで、「オリンピズムの目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指すために、人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てることである」と定める。しかし、スポーツとは、対戦相手に身体的危害を加えたり、相手の裏をかいたりすることがルールのもとで認められ、場合によっては称賛されるという、通常の道徳的規範が通用しない特殊な営みである。こうしたスポーツの特殊性を考慮すると、オリンピズムの実現可能性はきわめて疑わしいものになってしまう。

とはいえ、オリンピックが「平和な社会の推進」に貢献する試みを積極的に取り入れていることは、パラリンピックの普及やオリンピック休戦の導入などからも明らかである。最近の例では 2018 年の平昌オリンピックで開催国である韓国との政治的対立により不参加を検討していた北朝鮮が、開会式で統一旗を掲げて韓国と合同入場行進を行い、また、アイスホッケーでは北朝鮮と韓国の南北合同チームを結成するなど、政治的課題を乗り越える努力もまた見られる。こうした「競技外」での平和促進活動は、オリンピックが単なる大規模の世界大会ではなく、あくまでもアマチュアリズムと平和主義を掲げる大会であるからこそ可能なものであるとも考えられるだろう。おそらくクーベルタンが念頭に置いていたことは、こうした競技外での取り組みからそう遠いものではないように思われる。

では、オリンピックの独自性は平和促進を目指す世界大会であるという点に尽きるのだろうか。この問いは、スポーツは内在的価値を持つか、という、スポーツ哲学・倫理学の分野ではよく議論される問いと関わりを持つ。なぜなら、スポーツには、(スポーツ以外の手段では達成できないという意味で)内在的な価値を持つことを論証し、さらに、こうした価値は実際にオリンピックに参加する競技者のみならず、スタジアムにおいて、あるいは、各種メディアを通して鑑賞する鑑賞者に対しても有意義なものであると考えられることを示す試みがなされているからである。確かにオリンピック開催期間中は主要メディアや人々の関心はオリンピックに集中的に向けられるという点で、他の世界大会とは一線を画する。ある哲学者はこうした状況を踏まえて「道徳実験室(moral laboratory)」としてのオリンピックの価値を強調するが、では、こうした価値をオリンピックは本当に有すると言えるのだろうか。本提題ではこの問いを検討し、肯定的に答えることを目的とする。